洛北宝池
半世紀回顧大会所感

鈴木丸衛

五月十二日(木)、快晴、正午前、洛北宝池の会場に到着。本日の会場は、国立京都国際会館であり、世界に名高い、紐育の国連ビルや、ジュネーブのパレ・デ・ナシオンに匹敵するといわれる丈あって、合掌造りの見事なる建物である。本日の大会は、半世紀回顧大会と銘打っての会合のため、全国から馳参じた辰巳会々員と同伴者は二百名を超える盛会となった。旧知の諸君と再会を喜び合い、旧交を暖めることが出来て、洵に欣快の至りであった。会場には、九十一才を迎えた、高畑誠一、永井幸太郎の両先輩も元気に御出席、会衆の拍手を受けられた。又宴会場には、大原女のサービス嬢十数名が、独特の扮装でサービスに当り、京都気分を盛り上げた。

宴を閉じ、記念撮影の後、散会したのは午後三時過ぎであった。

光陰矢の如し。鈴木商店が、昭和二年四月、解散してから、なんと五十年を迎えたのである。十年一昔といわれるが、実に半世紀である。昔は人生五十年と言われた時代もあった。五十年の星霜を経た今日、鈴木商店の同窓会的存在たる辰巳会が、今尚脈々として、生き続けているのは、正に世紀の奇蹟でなかろうか。なぜだろうか。彼是考えているうちに、フト、「積善三家必有餘慶」という格言に想い当った。これあるかなと思ったのである。鈴木商店は、日本の産業の改善発達に、又貿易の振興に数々の貢献をした。つまり、積善の家に外ならなかったのである。今試にその数例を挙げて見よう。

第一にあげたいのは、「日米船鉄交換」である。第一次欧州戦争(大正四年～七年)に際し、英米はその自衛上、鉄材の輸出禁止を断行した。慌てたのは、その輸出に依存して居った日本を含む諸国の鉄工業者であった。日本では国を挙げてその対策に狂奔し、外務省を始め政府機関が総力をあげて、対米説得を続けたが何の効果も得られなかった。この時に当り、民間の解禁対策委員長として、鈴木商店の金子直吉さんが、時の駐日米国大使、ローランド・モリス氏と接触、「船鉄交換」という奇想天外の提案を示し、迂余曲折の後、見事に交渉妥結に至らしめたのであるが、その内容は米国の解禁鉄材数量の三分の二は船を造ってお返しをしようというのであった。金子さんの奇才、否鬼才が、日本の危機を救ったのである。鈴木商店が米騒動で焼打の悲運にあった大正七年の春、この日米交渉妥結の吉報が神戸に伝わるや、諏訪山公園で祝賀の花火が盛大に打揚げられたのを覚えている。

神戸には川崎、三菱の両造船所、神戸製鋼所等あり、皆蘇生の想をしたのであろう。独り神戸のみならず、日本の鉄工業者総ての喜びの花火であったことと思う。日本の運命は正にこれによって開かれたのである。

第二の例は、人造絹糸産業の創立である。大正の初期、日本国内では、米沢高等工業学校の研究室で、秦逸三教授が人造絹糸の研究をして居った程度であったのを、金子さんが、東レザーの技師長久村清太氏を右研究に合流させ、研究費を出して、諸外国の人造絹糸産業の実情を調査させ、遂に帝国人造絹糸株式会社の創立を見るに至ったのである。之が現在の「帝人」の前身である。

第三の例は、クロード式窒素工業株式会社の創立である。第一次欧州戦争終了直後、巴里のエアー・リクイド社のクロード技師長が空中窒素固定に成功せるニュースが世間に伝わるや、

逸早くその特許を、ロンドンの高畑支店長の尽力により鈴木商店が買収し、前記の会社を創立し、彦島に工場を建て、右特許によりアンモニヤを造り硫安を生産して居ったが、鈴木商店の解散後は、三井の手に渡り、東洋高圧により事業を引継がれたことは周知の通りである。

第四の例は、油脂産品への貢献である。第一次欧州戦争当時、鈴木商店は、縦横無尽に活躍して大儲けをしたが(西川政一さんの「神戸より倫敦へ」御参照)その金をどうしたかといえば、その大半は油脂工業の発展のため使ったようである。即ち、大連、兵庫、鳴尾、清水、程ケ谷及王子の六工場を買収又は建設して運営したのであるが、そのうち兵庫魚油工場では、硬化油の製造に乗り出したのである。私は大正六年鈴木商店に入社し、樟脳部に勤務して居ったが、主任の楠瀬正一さんが、硬化油本部の部長を兼任して居ったので、同部と机を並べて居ったため、硬化油本部の業績の進展ぶりを、眼のあたりに承知して居ったのである。兵庫魚油工場に隣接して、フランス系の酸素製造会社があり、造船所や製鋼所等へ酸素を供給して居ったが、酸素は水を分解して造るので、副産物として水素が出るのを鈴木商店は、之を買収し、之を以て魚油を処理して、液状の魚油を硬化油、即ち石鹸様の固体とするのである。之は同工場の主任の久保田四郎工学士の、海外調査研究の結果であった。その技術は更に進んで、固体が粉状となり、〝HARDENED FISH OIL IN POWDER〟として輸出しようとしたが、運賃が重量屯でなく、容積屯で取られることが分かり、引合わぬこととなって粉状硬化油の輸出は遂に立消えになったようである。

魚油工場の一例をあげたが、他の大豆油諸工場でも、大正十一年頃には、一日千屯内外の大豆をつぶして、製油と製肥業をやっていたものもあり、夫々顕著なる功績をあげて居ったのである。

第五の例をあげれば、化学工業に欠くべからざる工業塩の生産がある。直系の大日本塩業株式会社(日塩の前身)により関東州大連を拠点に、附近のヒシカ、普蘭店、五島、双島湾に、六千町歩を超える広大な地域に、天日製塩場を造成し、海水を汲み上げて、陽光と風を利用して、年産三十五万屯以上もの、天日塩の生産をあげて居ったのである。

以上、試みに五例の「善行」をあげたが、鈴木商店はまさしく「積善之家」に外ならぬことが明かである。将来「辰巳会」の名が消えることがあろうとも、鈴木商店の日本産業の進歩発展、貿易の振興に竭した偉大なる功績は、歴史と共に永遠に残ることと信ずるものである。

半世紀の回顧

宇津木亥一

五月十二日に京都国際会館に弐百余名集り回顧五十年記念大会が催された。曩り空ではあったが本会は実に有意義であった。いつもの様に皆は笑わない。お喋りも余りせぬ。大会が終末に近づき竹下錦光夫人が演壇に立って『老人いまなほ嬰鑠として此の処に集る、その心中を誰が知らう、窓外緑間に鐘声を聞きつつ沈思する』という意味の詩吟が朗々と聴えて来たとき、涙がどっと溢れ湧き止めようもなかった。列席の誰も彼もが踏越えて来た幾山河の五十年の歳月に対する回顧が或は夢の如く或は暴風雨の如く胸裡を衝き走ったことであろう。この詩吟は圧巻であった。

私にとっては鈴木スラバヤは第二の故郷であった。青春四ケ年の勤務を終って、これから内地の生活に入ろうと楽しんで帰朝した其の春が昭和二年四月である。夢想もしなかった大事態

が現実となって身辺に到来したのである。

……一個のリュック・サックと生命とを携えて二十一年春、大竹港へ引揚げて来た。日沙が明治四十年代から開拓にかかり、曲折を経て獲得した広漠なゴム、エステートと、その永世に亘る租借権とは、戦時に入り数百の人員を送り鋭意開発に協力した水銀鉱山、天然炭坑等と共に一瞬のうちにその総てを剝奪され、余多の社員の身血は南海の藻屑となって消え失せた。帰って見ると芦屋の自宅は戦火で無く家族は四散して居た。

色々と詮議の結果、同年内に神戸製鋼所へ配属され三ケ年勤務し、木村喜之助氏の要請を受けて、T株系のグレート・ノーザンへ入社すると間も無く廬構橋事変が勃発し、満州国建国等等と遂に第二次世界大戦へ突入した。神戸の貿易関係は総て瓦壊し終り、戦時に則せぬ各事業の存在の意義を失った。

神鋼から帰って来いと云われたが、その時、日沙の社長西川玉之助氏が以前から知遇を得て居たので喜んで受け納れて下さった。一年余、東京と広島とで現地向資材の発送をしてから北ボルネオ、クーチン市へ派遣された。昭和十八年秋から現地で所謂戦時開発の南方政策に従い走狗の如く奔走し、その暁には一個のリュック・サックと生命とを携えて二十一年春大竹港へ引揚げて来たのであった。その時すでに芦屋の家は戦火で失せ、家族は四散して居た。

昭和二十一年秋から京都の生活が始まる。進駐軍関係は一切避け、毎日の如く府庁と市役所と引揚団体との間を往復接衝し、引揚者の更生と福祉に少しでも利益多からん事を願って専念したが、妙法院に御滞在中の久邇宮からも引見され、しっかり遣って下さいと励まされた。東山馬町に専売公社の倉庫が空家のまま放置されて居たので之を借受け、引揚者の再起更生事業を始め、其れに追随する幾多の辛酸を嘗めた。

それから三十年の日月を閲する。引揚に関する仕事は佐藤内閣になって一応ピリオドを打ち、昭和三十六年小さいながらも株式組織の小会社を作り、仕事をして行くうちに地域内にも親しき友人知巳は多数になり、辰巳会員の友人も知巳も、柳田義一さん始め遠近を問わず屢々来訪して下さるようになり、私の存在も漸く認められた心地がする。何も彼も命あっての物種で、世の好意と厚い友情の賜であると感謝するのみである。

（五二・五月）

錦上花を添えて

大幡久一

皆さん、今日は御忙しい処、また遠方から態々かくも大勢御来会下さいまして、誠に有難う存じます。幹事一同に代り厚く御礼申し上げます。

高畑さん永井さんが御見えになっておられます。御両氏に御立ちを願いますから皆さん拍手でお悦びを申し上げて下さい。

さて、本日の大会は鈴木商店運命の年、昭和二年を回顧して開かれるものであります。この間、実に五十年、半世紀の長い歳月を経過しており誠に意味深いものがあります。当時全株式を所有した子会社十三、過半数を所有したるもの十六、半数以下ながら支配権を有していたもの十四という多数の子会社があったのでありますが、その大部分の会社は今日益々盛んに活動を続けられておるのであります。

私は当時帝人広島工場に居りましたがモラトリアムの公布を予知して銀行から現金五十万円を出して来ましたのですが、これが保管にとても苦労致しました。今日から見ると些々たる金額ですがお米が一升二十五・六銭で今日の三九〇円と比べると一五〇〇分の一に過ぎませんから、現在の価格にしたら七億五

千万円位に相当しますから苦労したのも無理はありません。

佐藤社長のお伴をして銀行廻りをしましたが二時間経っても会ってくれません。私は若いからかプンプンしましたが佐藤さんはじっと我慢されていたのが今も眼の前に浮んで来ます。こんな思い出は皆様も同様に御持ちのことと存じます。今日は出来るだけ沢山な方々に集って戴き積る話をしていただこうと存じました。それで出来るだけ会費を安くしたいと思いいろいろ考えました。神戸製鋼、帝人、日商岩井、太陽鉱工の四社からはいつも手厚い御援助を戴いておるのでありますが本大会は特別として御協賛を御願い致しました処、各社とも心よく御承引下され過分の御寄附を戴きました。この他にも進んで御寄附をいただいた処が御座います。こうして今日御覧の通りの盛大なる会合を開くことが出来ました。ここで厚く厚く御礼を申し上げますとともに皆様に御報告申し上げます。

現在の正会員は四九三名、準会員五九〇名、合計一〇八三名であります、去る四月二十八日新仏の供養塔への入魂を兼ねて竜祥寺にて法要を営みました。これで入魂された方は一〇七五名となります。

西川文蔵支配人の激発

斎藤馬吉

大正七年八月十二日夜、本店が米騒動で焼打ちに逢った。その直後西川支配人から倫敦の高畑出張所長に長文の手紙を二回に亘り訴えて居られる。恐らくその混迷のさなかにもかかわらず便箋に二十一枚（大正七年八月十五日附）及び口述代筆（八月十七日附）に理路整然と名文もて書き綴られている。

この書簡等六十年目の今日計らずもSZK五十年回顧の記念として西川政一氏は岳父の遺された難解能筆の手紙を「神戸より倫敦へ」と題する冊子をものされ辰巳会員及びその関係者に広く配布されたことは感謝に堪えない。早速これを繙き当時を思いおこし再び吾等は忿懣やる方なさを覚えた。

米価高騰による社会不安たる矢先きに於いてマスコミが如何に火に油を注いだ形になったか、不断温厚な支配人がその下手人を名指してまでもその無謀を鋭く衝いておられる。

「大朝が故意に毒筆を弄し事実を捏造して、今日の米高は鈴木商店が主謀たるかの如く書き立てし結果蒙昧なる愚民の誤解になり茲に到り候事誠に悲噴の至りに候」とあり更に大朝が近年社会主義者の主筆鳥居素川の権力拡大にして……殊に鈴木攻撃に寧日なく……新聞の操縦程厄介なるはなく又日本の新聞記者程仕末に了えぬもの無之候」と書いて居られる。

扨て鈴木商店はその当時輸入米を事実安く大量に配給して居たと云う地方の受入側の歴然たる記録が手許にあるので之を抄記して御参考に供したい。

「静岡市史」静岡市編纂近代史料中、米騒動関係記事一〇九一頁より一一一三頁の中鈴木商店に関するものを拾うと、

○大正七年五月一二日（八五〇八号）

政府が外米を一石十八円七十五銭で売る事になり、売る店は東京の三井、神戸の鈴木、湯浅、大阪の岩井の四軒と決り居る。本静岡県は種々関係もある神戸の鈴木商店から仕入れる予定、神戸で十八円七十五銭に運賃諸掛を見込んで二十円内外即ち一升二十銭内外で入手出来るべく杉山書記長が神戸に出かけて二十五日頃迄に入荷するやう交渉する。

○大正七年五月二十三日（八五一九号）

静岡商業会議所より神戸の鈴木商店へ発注の外米はエス・キュー印一五六〇袋なりしが二十二日附同店よりの通牒に依れば今回分は二車三・四日中即ち一六〇袋送付、残余は未定。

○大正七年五月二九日（八五二五号）
政府指定商神戸市鈴木商店より割当の二車分一六〇袋の外米は二十八日静岡駅着荷
○大正七年八月一三日（八六〇〇号）
静岡市米穀商宮崎宇平氏は同市商業会議所の斡旋にて神戸鈴木商店より輸送を受けし蘭貢米一〇〇袋全部を提供して静岡市役所を経て下層貧困者に配給方を依頼せり
○大正七年八月一四日（八六〇一号）
静岡商業会議所より神戸鈴木商店に註文の蘭貢米の回送残部三〇〇袋の内十二日二〇〇袋静岡駅に到着し残余は今明日中回送し来る筈。以下略。

これは一部の記録にすぎないと思うが恐らく他の地域に於いても同様の配給が行われて居たと思う。米騒動といえば誰しも鈴木の買占めという汚名で世上を流していることは吾ら遺憾千万である。本筋は政府の指令に忠実に他の三社を圧して大量の輸入米を極めて安値で配給に努力していたのにも拘わらず一部マスコミの業の不届きは許し難いが今からでも遅くはない、過去の汚点を徹底的に叩き潰し、青天白日の鈴木の姿勢を正しく天下に知らしむべきである。

（五十二年六月十六日）

全国大会に思う

竹下富士松

人生僅か五十年—古くから云われたこの文句も今は通用しなくなった。併しひと口に五十年といっても過ぎてみると短かいようでもあり又長い歳月でもある。思えば私共のこの五十年は特に世の中の変遷が激しかった、早い話が米一升二十銭か三十銭で買えたものが今ではざっと五百三十円余。将校商売下士勝手兵隊一銭五厘の命がけといわれたその葉書が今二十円、将校商売のあのカーキ色の軍服姿も今は昔の語り草、一事が万事他は推して知るべしである。自由だ権利だ個人だと云いたい放題仕放題、その是非、善悪はともかくとして人の姿も世の中もその様相は変ってしまった、だが併しここに唯一つ昔のままに少しも変っていないものがある、それは人の情ではあるまいか、私はここにその証左をみた。

所は京都国際会館、世界屈指の会議場。時は五月のさつき晴れ、鈴木の名消えて五十年。西から東から集る会員二百余名、昔を偲ぶ辰巳会全国大会。そこに私は追慕の情のゆかしさ友情の美しさ旧情の温かさを見た知った。その昔同じ釜の飯をくい胸中大志をひめて羽搏いた青年紳士、或は夢を抱いてリスのようにとび廻った腕白ぼんさん、その人々が五十年後の今日、鈴木時代はよかったナーと只その想いでこんなにも多く参加した、その中には老軀を夫人に支えられ或は弱った足を杖に托した先輩の姿もみえる、だがその人達の顔は明るくこの催しこそ台公出でずんばの気慨がみえる。十年目に逢う同僚、三十年五十年目にみる先輩、胸の名札をみてヤア君かと手を握る、肩をたたいて昔を語るその顔の何んと晴々と楽しそうな事か、鈴木という傘の中で育てられた友情が心の中によみ返り昔の姿その侭に懐かしさに瞳もうるむ人の情の温かさ、盃を傾け互の健在を悦ぶ友の情けの美しさ五十年昔のままである。そこに何んの利害関係もなく何んの不純も存在しない只人情の尊厳さをみる。辰巳会存在の意義ここにありと思ったのは私ひとりではあるまいそこには鈴木に育てられ鍛えられた精神が根性が脈々としてみんなの心の中に生きているから。

私はパーテーの席でサービスをしていた大原女姿の娘さんから「この会ってどんな会ですの？」とたずねられた私は胸を張って簡単に説明すると「そうどすか道理で皆さん楽しそうね、いいワねとてもいい感じ」大原女は感心したかのように盛んにうなずき目をみはりこの和やかな雰囲気に酔っていた。

何はともあれこの求めても求めえられない心の連なり、純粋で敬愛と友情に結ばれた会の限りなく続く事を願いたい。

次回は回顧七十年か。是非その催しを今から幹事のみなさんにたのんでおこう、あと二十年かそれ迄先輩の諸兄元気でお逢いできますよう。

人生僅か七十年も今は次第に遠去りつつある、近い将来せめて私達だけでも人生僅か白寿迄と頑張って欲しいもの、そんな思いで三々五々帰途につく先輩の後姿を見送った私である。

辰巳会賛歌

作詞　竹下富士松
朗詠　竹下　錦光

天下取ろうか三分しよか
目指す制覇の夢やぶれ
鈴木の姿消えたれど
残せし偉業今も尚
語り伝えて惜まる、
声を誇りに生き残る
六百余名の残党が
北の果より南より
集いて交す花の宴
昔を偲ぶ辰巳会

功なり名とげし人あれば
余生を趣味に生きる人
たどりし道は異なれど
思いは同じ釜の飯
食って育った兄・弟
昔のま、の家族主義
そこに身分の上下なく
まして貧富のへだてなし
ともに手をとり肩た、き
昔を語る辰巳会

白髪頭に杖ひくも
年はとらぬと気は若し
みよその顔色を血色を
平均年令七十八
まだ〳〵伸びよ米寿まで
いっそ百迄頑張るか
昔鍛えた身体じゃないか
ニッコリ笑って手をとれば
その手にあつい情こもる
昔のま、の辰巳会

あの顔その声その仕草
後姿に昔のくせが
残っているぞえ思いだす
ぼんさん時代の面影を
はげた頭をなでながら
孫の自慢に花咲かす
友の消息語りあい
互いの無事を祝しつ、
さす盃に花が舞う
昔なつかし辰巳会

槍はさびても名はさびぬ
うたの文句じゃないけれど
お店の名をば汚すなと
心に誓う残党が
名を惜しみつ、移りゆく
世の風潮をよそにみて
偲ぶ昔の未練花
花の名残りはつきねども
忘れまいぞえその色香
昔を思う辰巳会
あ、あの日から五十年
西に東に別れても
胸にひめたる米マーク
高き誇りと想い出を
抱いて集う残党が
とけぬ絆に結ばれて
今日もみせたぞすこやかに
年に一度の大会だ
得意のノドをきかそうぞ
昔にかえる辰巳会

和歌

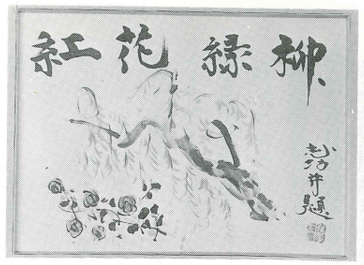
「背水の陣家に迫るさくらかな」（片水）

花の名残りの春をしぞおもう

偶感　二題

慕情難絶集西京
胸愁開以温旧情
傾盃語五十年旧
夢更新辰巳大会

老軀矍鑠盛壮気
辰巳大会西京宴
人不知胸中在高誇
窓外緑間聴鐘声



棟方志功作品

長寿説法

伊予今治　米寿
田坂榎松

水仙や飯郷のわれに兄の家
東風や犬山城の旗手雲
玲瓏と夏山影の大神戸
ひからかさ淡路絵島の岩がくれ
天正の落葉もあらんかと歩む
囃子方皆一族や松囃子
読初や長寿説法酒の巻
小器ただ米寿迎えしまでのこと
夕餉まだ茶摘の妻の戻らねば
縁先のぬれているなり鮎の店

（元神戸製鋼所購買課長　田坂鉄平氏）

つばくらめ

柳田義一

堪ゆることもどかし蓑虫が揺れる
鳥交む合掌造りのつきはぎに
狂言師膝に面おき春惜しむ
蟻地獄ひそと傾く蟻の列
涙痕悉く風紋涅槃の図
海鳴りが山鳴りを越えるつばくらめ
あらぬ方独りを棲ませて春鏡
夏草や側面の微光鑑真像

鈴木商店回顧五十周年
記念大会にて

今村蕾橘

薫風や二大長老すこやかに
青嵐一騎当千の士二百
若葉風五十年余死闘経て

月明の渓

原田筑水

朴咲いてより月明の渓匂う
鳥雲に物干ばさみ笊に盛り
巣燕を見て居り軽き袋菓子
濃山吹法衣かけ干す手摺古り
古都寂びて土塀の続く薄暑かな
水漬の田の際汽車はひた驀る
阿蘇の谷白雲湧きて夏めきぬ

全国大会余談

待望の全国大会も大過なく終りを告げることとなったが、その後の幹事会に懸った大切な議案は、わが辰巳会創設以来、その発展の途上献身的に御努力願ったのにもかかわらず、喜寿にも満たず夭折の運命を辿られた方の余りにも悔しく、この大会を期して謝恩ともなる記念品をと再三審議の結果、特別彼の高畑会長御揮毫の輪島塗大盃を左記の方の御遺族に御贈呈申し上ぐることとした。

東京支部　安東直市　嶋内義治
　　河井一雄
中部支部　伊藤庄次
本　部　十河一正　橋本隆正
　　木畑龍治郎

（略敬称）五一・七・四

◆原稿募集

内容　随想　短歌　詩　俳句　絵画
　　写真　鈴木往時の思出等
必ず原稿用紙で（縦書）四〇〇字詰　五枚程度
締切り　昭和五十二年十月末日
送り先　神戸市生田区京町七二
　　太陽鉱工（株）内
　　「たつみ」編集部宛

五十年前の運命の日の思出

高橋宇三郎

思出を記す前に、自分の鈴木商店入社の経緯を大略する。

自分は、長崎高商在学中、帝人の久村さんと二高、東大工学部共に同期生であった。長崎高商の浅野金兵衛教授より商品学の時間に、久村さんの日本のレーヨンのパイオニアーであり、この事業の将来性あることを学び興味を持っていたので卒業論文に、日本の人絹工業と題して提出したことがあった。又同校の田村教授よりコレスポンデンスの時間に、神戸高商を出られて、当時鈴木商店の倫敦支店長として活躍して居られた現辰巳会高畑誠一会長のことを詳しく話され、自分達高商の学生にとっては、羨望の的となって居た。右の様な訳で卒業時に浅野教授よりの紹介状を持参して当時の久村技師長の面接を受けた。更に同郷の出身で而も西条中学出身の河上哲太文部政務次官の西条中学の同期生であられる高畑誠一会長宛の紹介状を同河上政務次官より受け、神戸市の鈴木商店竹岡筍三秘書の面接を受けて之を渡し、同氏より佐藤法潤社長と内海静太郎専務宛の紹介状を受けて、帝人総務部の佐藤法潤社長と内海静太郎専務の面接を約一時間位受けて辞去した。其の結果一ケ月位して採用の通知を受けた。

ところが昭和二年春四月金融恐慌の荒波に呑まれて、男子生涯の職場として選んだ鈴木商店の没落は真に青天の霹靂であった。自分は当時帝人総務部の会計係に勤務して丁度一年目の春であった。入社の翌春で、丁度新婚家庭を広島市比治山の山麓に持って居た時であった。支払停止（モラトリアム）の時の仕事上の思出は若干あるが、割愛して次に私的の思出のみを左に記す。

右金融恐慌の丁度一年前、長崎高商の武藤長蔵博士の御兄弟である武藤長平広島高師教授の宅で、十五銀行広島支店次長と共に快談したことがあった。たまたま同教授より、現金壱万円位持って居るのだが何処かの銀行に預金し度いのであるが何処が良いかと質問を受けた。其時十五銀行は、宮内省の指定銀行であり、又同席者が長崎高商の先輩で、十五銀行広島支店次長であったので、同次長と共に十五銀行広島支店に預金する様すすめたものであった。ところが一年後に例の未曽有の金融恐慌の直後、同教授に街で偶然に会い、困ったことになったとの話を自分にされた。神ならぬ身の、右金融恐慌を予測するすべもなく、深く同教授に御詫したことは今尚記憶に新たなことである。

斯うして書き了えて見ると、自分の履歴書を書いている様な気もするけれども矢張人生の迂余曲折を憶い感慨深いものがある。

（昭和五十二年五月十五日）
（元帝国人絹勤務）

人と機械を信頼で結ぶ
帝人製機
大阪本社 大阪市東区北浜3-7-3 ☎06(202)0371
東京本社 東京都中央区銀座6-14-4 ☎03(543)4611
営業　化繊合繊機械　航空機部品
品目　油圧機器　工作機械　産業省力機械